「獣害問題」におけるむら人の「言い分」 ——滋賀県志賀町K村を事例として——

The Rural People's Opinion on "Wildlife Issues":
A Case Study in K Village, Shiga Prefecture

赤星 心*

Kokoro AKAHOSHI

The purpose of this paper is to explore how we should build the relationship with the wildlife doing negative effects on the human life. The "Wildlife issues" taken up here is the damage to crops by wild boars. The damage by wild boars has become a crucial social issue in Japan's rural area. Although the reason of the increasing damage has been an object of study in various fields, for example in the ethology, there is little study from sociological angle. This paper focuses on rural people's opinions, which are investigated through intensive interviews. The opinion of people who have suffered from the wild boars' problem is, in fact, the key to an understanding of "Wildlife issues".

The most interested finding is that the people's opinion on the wild boars' problem relies not only on their personal direct experiences, but also on the common view constructed in the community life. The latter view is crucial, when the community members decide to deal with such kind of issues.

1. はじめに

近年、野生動物による農林作物被害が大きな問題となっている。このような野生動物による被害問題は一般に「獣害問題」⁽¹⁾と呼ばれており、イノシシ、シカ、サルなどの中・大型哺乳類によって農作物や耕作地が荒らされるといった被害が全国的に発生している。

獣害が発生するようになったのは、中山間地における生業の変化が要因のひとつだといわれている。高度経済成長期以降、中山間地において過疎化、人口の高齢化が進行し、それに伴って耕作地が放棄または林地化された。それらが野生動物にとって格好の餌場となり、結果的に個体数の増加につながったのだという(三浦、1999)。また、里山における人間活動の撤退によって、イノシシなどの野生動物は集落付近まで降りやすくなり、農作物をエサとする

ようになった。このような農作物の味を知った野生動物によって、かえって被害が増加しているという指摘もある(江口、2001a)。

このような「獣害問題」に関する研究としては、野生動物の生態的研究が主となっており(江口、2001b; 小寺他、2001)、これらの動物行動学的アプローチが「獣害問題」の解決に対して有効であることは疑いない。しかし、獣害を問題として構成しているのはあくまで人間の側である。人間活動が野生動物の行動に影響を与えていることのほかに、人間側が野生動物にどのような視線を投げかけ、野生動物の特定の行動を問題と認めるかという社会学的視点も、「獣害問題」の解明にとって不可欠である。本稿では、農村部において最前線で野生動物と接している地域住民が、「獣害問題」に関してどのような意見をもっており、それによっていかに野生動物への対応が方向づけられているのかについて検討する。野生動物の中でもとくにイノシシによる獣害を取り上げる。その理由は、イノシシによる農作物被害は稲作・畑作ともに著しく、対策が農村地域では

* 奈良女子大学大学院生

大きな課題となっていること、また獣害の増加に伴い住民にとって身近な野生動物となっているからである。

2. 「獣害問題」における住民の「言い分」

環境問題としての「獣害問題」について丸山(1997)は、害を受けている住民は同一生物種に対して否定的価値と肯定的価値を併せもっているという。この中で、ニホンザルによる害を被っている住民が、サルを「土地のもん」という、そこにいて当たり前のものとして捉えている一方で、「負荷」を伴う具体的な存在としても認識していることを明らかにしている。またこのような認識が、解決策として長期的な取り組みを模索しようとする、住民のサルとの「共存への意思」を支えているのだと述べている。

このような、日常的に野生動物に接し対処している地域住民にしかもちえない複雑な意識は、野生動物と住民との「共存」を考える上で重要な要素といえよう。しかし、「獣害問題」は地域住民による個別の対応によって処理できる問題ではなく、集団的な対応が必要である。なぜなら、野生動物のもつ移動性のために、獣害が発生するリスクも広域的なものとなり、分散した耕作地を個人的に防衛することには限界があるからである。さらに野生動物の生息環境を制御するには、個々の所有域を超えた面的な対応が必要とされるからである。その場合、集団で対応する地域社会内部においてある程度意思決定が求められる。

住民の意思決定に関しては、生活環境主義における「言い分」(鳥越、1997、38～41頁)が大変有効な概念である。鳥越は、ある問題やテーマに対して共通の「自界」をもつ者どうしが連合し、「他界」との「交流」を通してその固有性を確保するのだという。この「交流」とは、「自界」を形成する人びとが明確に「他界」の存在を自覚し、そのことによってみずからの独自性を再確認することだと述べている。ある問題が生じてその問題に働きかけようとするときに、この「自界」を形成する者たちの自己納得と他者への説得のための論理が「言い分」であり、「自界」の人びとがそのできあがった「言い分」の論理で動き出すのだという。

丸山(2002)は鳥越の「言い分」論について、激しい対立が顕在化していない状況の分析方法としては不十分な点があると指摘している。「言い分」論

が目的合理性や価値合理性の枠内にあること、さらには「言い分」が依拠する「日常的な知識」のうち、「体験知」の詳細をブラックボックス化しているという。これらに対して丸山は、ニホンザルによる「獣害問題」の事例から、住民にとってサルは「害獣」だけではなくさまざまな存在であることを指摘し、サルとのかかわりを通して「迷いやためらい」として表現されるような揺らぎ(丸山、2002、32頁)を含む総体としての体験知が存在していることを示唆している。そして、それが揺らぎを持つ「言い分」として言語化されるのだと述べている。このように言語化された「言い分」は「主体によって発せられると同時に、主体そのものの揺らぎを表現する行為」(丸山、2002、25頁)なのだという。また、行政的対応の場において、主体のもつさまざまな「言い分」のうち被害感情という一部だけが強調され、その異義申し立てを解消するために、行政は駆除を行なうのだと述べる。同じように、生態学においても人間とサルとの物質的な関係性にもとづいて問題が構成されており、住民の多様な意見を扱うことは困難だとしている。このように住民のサルに対する多様な見解は、行政や生態学的な議論の場面においては十分に理解されず、ニホンザル問題が社会問題として構成される過程において「《さまざまなサル》が存在する言説空間」(丸山、2002、33頁)の不整合が生じているのだと述べる。

サルに対する住民の複雑な意識を、立場の異なる人間が理解しようとしても困難であるため、認識のずれが生じていることは理解できる。しかし、丸山のいう「言い分」とは、あくまで一主体によって発せられた意見であり、「揺らぎ」をもつことは当然であろう。だからこそ鳥越は「人の心は分らない」(鳥越、1997、39頁)としているのだ。分らないなりに住民の複雑な意識を表現しようとする丸山の試みは、とかく見落とされがちな部分への提言として評価すべきではあるが、「言い分」が「自己納得と他者への説得」(鳥越、1997、39頁)の論理である以上、丸山のこのような個人的な意見を「言い分」といい換えるのは混乱を招くのではないだろうか。

また、駆除に関しても疑問が残る。もし丸山が述べるように、行政側が一部の住民の「言い分」を勝手に理解し、それ以外の「言い分」を「沈黙」として扱うことによって駆除を選択しているとすれば、受容されなかった「言い分」を住民はどう処理するのだろうか。丸山のいう駆除は、それに関する法的

表－1 聞き取りデータ一覧

番号	性別	年齢	主な農業従事者	農業経験	インタビュー回数 (時期)	出荷量	実耕面積 (田) (a)	実耕面積 (畑/果樹) (a)
①	男	70代	本人	57年	1 (02年4月)	一部出荷	60.8	-
②	男	70代	本人	25年	2 (01年8月11月)	一部出荷	28.2	-
③	男	70代	本人		1 (02年7月)	一部出荷	-	20.0
④	男	70代	本人		1 (01年9月)	自家消費	27.5	7.0
⑤	男	50代	本人		2 (01年9月11月)	自家消費	13.7	-
⑥	男	50代	-	非従事者	1 (02年9月)	-	-	-
⑦	男	30代	父親	非従事者	1 (01年9月)	一部出荷	81.0	3.0
⑧	女	50代	-	非従事者	1 (02年9月)	-	-	-
⑨	女	50代	夫	手伝い	1 (02年7月)	自家消費	-	9.1
⑩	女	40代	両親	非従事者	1 (02年4月)	-	29.6	-
⑪	女	30代	両親	非従事者	1 (01年9月)			

聞き取り調査、一部K村耕作台帳より作成

注) -印は耕作していないことを示している

な手続きとも矛盾する。鳥獣の駆除を望む場合、事前に鳥獣捕獲許可申請書を提出し、鳥獣捕獲許可証の交付をうけなければならない(「鳥獣保護法」⁽²⁾第9条)。その後、猟友会などによって駆除が実行される。実際に、このような法的手続きの通りに駆除が行なわれているかどうかはさておき、行政は住民側からの要請を受けて駆除

を行なっていることになる。この場合、丸山のいうような行政側の勝手な解釈ではなく、行政は住民の総意を受けて動くとするほうが自然ではないだろうか。

以上をふまえて筆者は、丸山のいうような多様な住民の意見が地域社会で同等に存在しているのではなく、住民によって統一された「言い分」へと調整されていると考えたい。「獣害問題」に関して住民は、ある「他界」を意識⁽³⁾しつつ、その地域社会内部において多様な意見を「沈黙」として処理しながら、野生動物を「害獣」として定義し駆除を選択するような「言い分」を形成しているのではないだろうか。本稿の課題は、この住民の間で統一された「言い分」の内容と、それが「自界」と「他界」の「交流」のなかで形成されてくるそのあり様を明らかにすることにある。

以下の構成について、まず次節では獣害が発生するようになった背景を農業活動の変化とそれに伴う空間的变化から述べる。4節では、とくに農業従事者を対象に獣害に対する「言い分」の形成を検討する。5節では、その農業従事者の意見が農業に従事していない人びとにどのように広がっているのかをみる。最後に6節でまとめと今後の課題について述べる。

調査地は滋賀県志賀町K村⁽⁴⁾である。現地における調査は、2001年7月から11月、2002年4月から9月にかけて実施し延日数は30日である。聞き取り調査を行なった実人数は34人で⁽⁵⁾、そのうち本稿でインタビュー内容を参照する対象者については表－1に記す。調査地以外に、滋賀県庁や志賀町役場、NOSAI(農業共済)において聞き取り調査や資

料収集を行なった。

3. K村の農業と空間的变化

まず、農村において獣害が問題化した背景を、農村における農業活動の変化からみることにする。全国的に発生している獣害は先の三浦(1999)の指摘にもあるように、経済的社会的変化が大きく影響している。真阪(1989)も山村経済や地域社会の変容による猿害の発生プロセスを明らかにしながら、野生動物の生態系は人間活動の影響を受けやすいと述べている。農村を舞台に、しかもイノシシによる獣害を対象とする場合、獣害が問題化する場における生業としての農業の変化をふまえることはとくに重要になる。それは、耕境の移動がイノシシと人間との緊張関係に大きく影響し、人々の意見に枠組みを与えるからである。

調査地は滋賀県南部の中山間地に位置する志賀町K村という集落である。この集落は、琵琶湖に流れ込む川の上流にあり、四方を急傾斜面で囲まれているため棚田が発達している。志賀町全体の人口は22,457人で、そのうちK村は360人、世帯数100世帯である(2002年現在)。人口は1970年の423人から比べると減少しており、高齢者の割合も高い。

1970年から2000年の農業センサスによると、K村における農業は兼業化し、この30年間で男性は約半分、女性においては約3分の1にまで担い手が減少している。さらに農業就業人口のうち60歳以上が7割以上を占めていることからわかるように高齢化の傾向にあり、産業としての農業の重要度は低下しているといえるだろう(表－2)。しかし、K村耕

表一2 農家数と専兼別農家数の変遷

	総戸数	総農家数	専業農家数	第一種 兼業農家数	第二種 兼業農家数	自給的農家数
1970	87(89)	81	1	45	35	-
1975	- (91)	69	1	7	61	-
1980	79(96)	60	0	0	60	-
1985	- (95)	64	0	3	61	-
1990	86(98)	62	3	0	59	7
1995	- (93)	61	2	1	58	10
2000	83(96*)	57	[4]	0	[35]	18

農業センサスより作成

注) 単位: 戸、() 内は世帯数、[] 内は販売農家、*は2002年統計、-は値がないことを示している

表一3 農業組合加盟農家の変遷 (単位: 戸)

	農業組合加盟 戸数	米を作付けし た農家	米以外を作付 けた農家	実耕作しな かった農家
1988	79	66	1	12
1997	75	63	3	9
2002	75	55	10	10

K村耕作台帳より作成

表一4 経営耕地面積の推移

	経営耕地 (a)	増減率 (%)	田の面積 (a)	増減率 (%)	畑の面積 (a)	増減率 (%)	耕作放棄 地(a)	耕作放棄 地率(%)
1970	8,350		7,970		370			
1975	4,189	-49.8	3,888	-51.2	268	-27.6	1,039	18.7
1980	3,667	-12.5	3,424	-11.9	242	-9.7	38	1.0
1985	3,591	-2.1	3,378	-1.3	210	-13.2	793	18.7
1990	3,429	-4.5	3,171	-6.1	252	20.0	1,339	28.9
1995	3,227	-5.9	2,970	-6.3	219	-13.1	991	23.8
2000	2,721	-15.7	2,443	-17.7	216	-1.4	1,324	33.7

農業センサスより作成

作台帳⁽⁶⁾によると、K村における農業組合加盟率は高く、じつに総戸数の9割以上となっている(表一3)。この農業組合は毎年行なわれる研修旅行など村の行事を主催することもあり、単に農業関係の機能だけではなく、村の運営に関しても重要な役割を果たしている。農業経営そのものは零細であるが、農業が依然として重要な社会的基盤を担っているといえる。

次に、このような農業の変容がもたらした耕作域の空間的な変化について述べる。耕地面積は1970年から1975年の間に約半分に減少し、その後現在にいたるまで徐々に減少傾向にある(表一4)。また各農家の耕作面積規模も縮小しており、減反政策による影響だけではなく、当地の水田が生産条件の不利な棚田であったことが大幅な減少の要因と考えられる。先の耕作台帳によると、米の作付面積の減少が著しく、それに伴って需給調整水田や放棄地が

増加している。図一1は1963年と2002年の耕作地の変化を、空中写真から図に示したものである。1963年には広範囲に広がっていた耕作地が、約40年の間に急激に減少し、散在していることが読み取れる。現在の耕作地の分布からすると、どこの耕作地においても獣害が発生する可能性があり、同等なリスクを抱えていることがわかる。耕作放棄地の増加が獣害発生の原因とされているが(三浦、1999)、このように図化することによって生業活動の変化と獣害との関係を視覚的に捉えることが可能となる。

この放棄地の拡大に関してK村では、1990年に浮上したゴルフ場計画も影響している。バブル期でもあった当時、K村の北部山地の一部をゴルフ場にしようとする民間企業による土地の買収が行なわれたが、1994年にその計画は断念され買収された土地は放棄された。これによって村北部の耕作放棄地が増加することになる⁽⁷⁾。

図一 耕作地の変化

以上、K村における農業の変化に伴う空間的变化を示した。このような空間的な変化によって、イノシシの生息域が住民の生活空間と接近し、K村においてイノシシによる被害が問題となる契機となっているといえるだろう⁽⁸⁾。

イノシシにとって耕作放棄地は格好の餌場であり、またすみかやヌタバ⁽⁹⁾となる。このK村においては転作・保全面積の増加も著しいが、イノシシにとっては放棄地も保全面積も変わりはない。また、生態的調査が進んでいない現在、イノシシの生息数が増加しているのか、遭遇機会が増加しただけなのか判断することはできないが、いずれにしても生業活動の変化によって獣害が拡散していることは疑う余地がない。さらに、日本の農業を取り巻く経営環境の悪化が日増しに強くなるなか、K村における生業活動の変遷そのものによって、住民の農業に対する意識も変化していると考えられる。それに加えて、獣害への防除対策にかかる負担の増大は農業者の意識に大きく影響を与えていると思われる。

4. 「獣害問題」におけるむら人の意見

(1) むら人の個人的意見と共通意見

むら人たちは、イノシシに農作物を荒らされたりその防除対策に追われたりするだけではなく、水田

に出没したイノシシを観察したりウリ⁽¹⁰⁾を育てたりと、さまざまな体験をしている。このような体験はおおまかに2つに分類できる。1つは直接的利害を伴う体験、2つめは直接的利害を伴わない体験である。前者は農作物や耕作地への被害を通じた体験である⁽¹¹⁾。後者は、先ほど述べたようなイノシシを育てた体験などに加えて、イノシシへの遭遇経験がない場合も含める。当然、前者も後者も同一のむら人によって体験されることもあり、後者の体験のみのむら人もいる。このような体験にもとづく意見は多様であるといえ、これらの意見を個人的意見とする。

一方、獣害をめぐる聞き取り調査において、多様な意見があるなかで複数のインフォーマントから同じような内容が聞かれることがある。その内容は、当地域独特のものであったり、広くメディアを通していわれることであったりするが、内容としては共通性がある。これらは、K村における「獣害問題」に関するレトリックであると考えられる。このレトリックとは、ある問題に対して「説得作業に使われる言語的な資源」（中河、1999、162頁）⁽¹²⁾であり、これをここでは共通意見とよぶ⁽¹³⁾。この共通意見が、すなわち先述の「言い分」であるとはいえない。なぜなら鳥越（1997）の「言い分」は、人びとがある問題に対して積極的なはたらきかけをする過程で形成される論理を想定していると考えられるからで

ある。当該地域の場合、むら人と「他界」との対立が顕在化しているわけではないため、「言い分」とよべるほどの論理がむら人にあるわけではない。しかし、むら人は「獣害問題」に関して、何らかの「他界」を意識しながら意見を述べていると考えられる。それを本稿では、「言い分」となりうる共通意見と捉える。

そこで、むら人への聞き取り調査から個人的意見と共通意見について明らかにする。また、共通意見に関して、どのような「他界」をむら人が意識しているのかについて検討する。具体的な分析に入る前に、本稿における主張点をまとめておこう。人びとの意見には、個人的意見と共通意見があり、個人の体験を通して形成される個人的意見は多様であると予測できるにもかかわらず、むら人はある方向性をもった共通意見をもっていること。また、このような共通意見が直接的な利害関係にないむら人にも共有され、外部に表出されていることを主張したい。

ここで問題となるのは、このような個人的意見と共通意見との違いを明らかにする方法が確立されているわけではないことである。調査者の判断に依拠しており、そこに確実な線引きをすることは困難である。そこで本稿では、さまざまな調査対象者へのインタビュー内容や、同一インフォーマントへの複数回のインタビューを比較し検討することで、個人的意見と共通意見の区別を試みる⁽¹⁴⁾。

(2) 農業に従事するむら人の共通意見と「自界」

まず、主な農業従事者を中心に「獣害問題」に対する意見について検討する。このような人びとは日々の農業活動を通じて、「害獣」によって直接的に害を被っており、それゆえに「獣害問題」に対して比較的明確な意見をもっていると考えられるからである。

では、K村における共通意見とはどのようなものであろうか。以下、インタビュー内容の分析によって明らかにしたい。なお、インフォーマントに関して番号は表一1のものと一致し、年齢、性別、農業従事者か非従事者か、また聞き取り調査を行なった状況の順に記載する。また、()内はインタビューの内容を分りやすくするため筆者が加筆したものである。

(被害の程度は)電気柵を張ってからは効果があって大きな被害はない。経費はかかるが被害が出

る前に張っておけば被害は出ない。(共済には)届けてもしょうがない。反収の3割の被害じゃないと出ない。わずかなら(掛け金が高くなって)あほらしい。(イノシシへの遭遇体験は)直接遭ったことはほとんどない。5年前に10m前にイノシシがいて田の土をつかんで投げたら逃げた。(被害が)よっぽどひどいと農業組合長から共済へ。保護区⁽¹⁵⁾に関して、監視員をしていた20年前に考えてもらえないかと訴えたことがある。保護区が変わらないのかと地元の人はおもっている。(丹波のように)イノシシのおかげで(生計を立てられる)ということはない。せっかく植えたものを食べられたら腹が立つ。農民は生活せなあかんから考えてほしい。

(①.70代.男.従: K村の会議所、区長同席)

毎年被害が出ている。田の一部。全滅までは行かないが、一部まかれたり⁽¹⁶⁾、歩いた跡があったり、穂をしごかれたりする程度。被害が出たら、区長に報告。区長が代表して駆除依頼の電話を役場にかける。保護区に入りこんだらどうしようもない。効果があろうがなかろうが獲ってほしい。百姓としては1匹でも殺してもらいたい。でも猟師は夏場とくに獲りたがらん。(獣害が増えた理由は)百姓する人が少なくなった。(農業だけでは)食べていかれんし。放棄地が増えてそこを住みかにしてイノシシも増えた。減反のためもある。イノシシは益獣か害獣かといったらやっぱり害獣にすぎない。つくったもん食われるし。(田を)クチャクチャーとしてたまらん。電柵とか手間とか考えると、コメを買ってるようなもんや、何してるかわからん。

(②.70代.男.従: 自宅にて)

サツマイモはイノシシにこの間めちやくちゃんにされた。出荷するから、勘定してつくっているのに全滅にされた。ちょっと柵をしていないとそこから入って荒らす。周りを皆で困う話があるが、これ以上お金を出すことはできないし、いろいろ難しい。

(イノシシには)直接遭ったことはない。田に行く人はちょくちょくあるみたいだけど。活動時間は11時から4時くらいやな。(イノシシを)殺してくれたらいいけど、(保護団体に)うるさく言われる。猟師も夏は獲りたがらない。冬にたくさん獲ったというけど、なんにも減っていない。最

近のイノシシは車のライト当てても逃げんというしな。車の前をとことこ歩きよらしい。(イノシシが増えた理由は)放棄地が増えてそこのミミズを食べて繁殖力が増したため。(イノシシは)害や。害獣でしかない。保護の人は殺すなというけど、口ばかり。つくっているもの身になってほしい。保護団体の人が金出してくれて、柵つくってくれたり何らかの対応をしてくれたらいいけど、何にもなしや。

(③.70代.男.従：耕作地にて)

3軒共同で電柵を設置、慣れてくると効果がない。夜は灯缶をたたいてイノシシを追う。(駆除に対して)猟師が動きたがらないね。かわいそうなんていってられない。保護団体は保護しろというが、田に近づかないようにしてくれたらいいが、何もしない。それで保護しろっていうのは無理だ。鉄砲を持たせてくれたら撃ってやるのに。稲刈りが少し早め。もう(水田の)もりもしてられないから少し早い気がするが刈ってしまった。共済降りるがぼんのわずか。共存とかいうが、おらんほうがいい。

(④.70代.男.従：耕作地にて)

去年は、下の1枚だけだったのに、今年は3枚ともすごい被害。10分の3俵くらいしかとれなかった。少し早い気はするが、これ以上被害が出る前に刈ってしまった。駆除は一応区長には言っているけど、期待していない。獲る人もいないし、繁殖もしているから。(イノシシが増えた理由は)山に食べ物なくなって、獲る人もいなくなったから。いなくなったら楽やね。柵とか張らなくていいし、刈るのも楽になるし。来年はきばって電柵するよ。

(⑤.50代.男.従：耕作地にて)

これらは、主に農業に従事している人たちに対するインタビューから得られた回答の内容である⁽¹⁷⁾。K村において共通意見であると判断できるものに下線をつけた。これらからわかることは、農業共済金制度⁽¹⁸⁾に対する不満や駆除の不徹底、さらに「保護団体」⁽¹⁹⁾に対して、保護一辺倒で住民の生活を考えていないというマイナスのイメージをもっていることがわかる。さらに、イノシシを「害獣」として定義しその排除を望んでいる。

このような共通意見から、主な農業従事者たちは、

「獣害問題」に関して、共通する「自界」をもっているといえよう。この「自界」に対する「他界」については後に検討する。

(3) むら人の個人的意見

しかしむら人へのインタビューにおいて、イノシシに対する「害獣」視ばかりが聞かれたわけではない。聞き取り調査の過程において、以下のように一見矛盾しているような意見がみられる。

山に花を採りに行って、野生動物は賢いと思った。イノシシの足跡がまっすぐではないのを見て賢いなと思った。

(①.70代.男.従：K村の会議所、区長同席)

結局、あいつらも食べなあかんのやし、しゃあない、という気持ちでいる。

(③.70代.男.従：耕作地にて)

ウリはかわいい。今年は3回イノシシに出遭った。つい最近タバコを吸いながら世間話をしていたらイノシシがおって、こいこいといったらお尻を振りながらちょろちょろと寄って来た。6時ごろ田の稲おこしをしていたら(イノシシが)いた。人間に気付いたら逃げた。ここのイノシシは人慣れしている。この間のイノシシも綺麗だった。毛並みもいいし。

(④.70代.男.従：耕作地にて)

駆除によるイノシシの排除を希望する意見が聞かれた一方で、同時にイノシシに対して憎しみだけではない意見がみられる。これらの意見はむら人の意識が矛盾しているのではなく、意見が表明される場の違いによる、個人的意見と村における共通意見との違いではないだろうか。この意見の違いは、同一インフォーマントに対して再度聞き取り調査を行った際に顕著にみられた。

(農業は)機械でやるから一人でできる。米も家族が食べる分の米があれば十分。あいつらも生きてるし、食べていかなあかん。すこし食べるくらいならいいけどな。

(中略)

若い頃は、ライフルを持って獲りに行ったもんだ。当時としてはライフルは珍しい。でも近所の人からは殺生だとかいわれて、良いことは聞かなかっ

たからやめた。動物もいんとあかん。見ているとおもしろい。こんなところが田舎やし、文化やし、いなくなったら成り立んようになる。(イノシシの)被害が出なければいい。

(中略)

イノシシが出たら、秋やなって気がする。いなくなったらおもしろない。こういうの好きやし。イノシシがおってもどもない。それが田舎やし。変化があってもおもしろい。だから3枚とも(電気柵で)囲うのではなくて、下1枚だけ残そうかとも思っている。以前は柿でも子供が食べていたが、最近は食べない。それやったらサルが食べればいい。昔はサルが食べても怒ったが。動物は、山で過ごしていたら問題ないのに。

(⑤.50代.男.従:自宅にて)

畑も1反2畝あるが、大根の種に1万円くらいかける。チョット植えても後はススキが生えるだけ。それならなんか植えていたほうがましだから。まちの人でもたくさん取りに来る。動物に取られても多少は構わない。売るのは少ないし、食べるのには多いから。

(中略)

取られたらそりゃあ腹立つけど、しゃあない。収入じゃないし。

(②.70代.男.従:自宅にて)

これらは、2回目に行なったインタビューの内容であるが、1回目のインタビュー内容と比較してみると内容に矛盾している点がみられる。対象者⑤の場合、1回目のインタビューでは、イノシシがいなくなることを望んでいるが、2回目ではイノシシの存在価値を認めており、駆除に対して否定的な意見もみられる。対象者②の場合でも、1回目のインタビューではイノシシに対する「害獣」視が強く見られるが、2回目では「しゃあない」と害を許容している。2回目のインタビューにおいても村に共通する意見がみられたが、一方で他のむら人からは聞かれないような、より個人的な体験や見解が多く述べられていた。

2回目のインタビューになると前回と異なった内容を話そうとするため、より個人的な内容となることは当然考えられることであるが、1回目の内容が他のむら人と共通していることは注目すべきである。このように同一被調査者に対する複数回のインタビュー内容の比較から、立場の異なる人びとに

してはフォーマルな共通意見としての「害獣」視が表明されやすいということがいえるのではないだろうか⁽²⁰⁾。

(4) むら人にとっての「他界」

以上、立場の異なる人びとに対して、むら人の共通意見が表明されやすいことが導き出された。では、立場の異なる人びとは、むら人にとってどのような存在なのだろうか。本研究における筆者の立場から検討する。

むら人にとって調査者としての筆者は、K村における獣害の実状を理解していない者といえよう。そして、その聞き取り調査においてむら人は、当地域の獣害の実状とそれに伴う被害感を語ることで、「害獣」の排除を望むむらの立場を説得しようとしていると捉えられる。よって、当地域の獣害を理解しえない人びとが、むら人にとって「他界」であるといえよう。

このような説得のための意見の中でも、とくに「保護団体」に対するむら人の共通意見が特徴的である。むら人の共通意見には「保護団体」へのマイナスイメージがみられるが、このような「保護団体」が実際に当地に訪れて駆除に対する反対運動を行なっているわけではない。この「保護団体」とは、さまざまなメディアや実際の見聞などを通じて、むら人の中でつくられたイメージであると考えられる。

丸山は、「自然保護」に対する多くの人のイメージが「大切な自然をまもるために、開発規制を行ない自然保護の呼びかけを行なう」(丸山、1997、151頁)という点に集約されているという。また、とくに都市部においてこのような「自然保護」に対する観念的なイメージが構成されていると述べる。

むら人の意見にみられる「保護団体」とは、このような「保護」イメージをもった人びとだと考えられる。それは、「保護団体」が「守れ」「殺すな」の一辺倒だというむら人の共通意見の内容からも推測可能であろう。そして、このようなイメージに対してむら人は、「駆除はイノシシから生業を守るために必要だ」という共通意見をもつようになったと考えられる。

さらに、行政的対応のあり方への不満も、説得のための共通意見となっている。K村周辺の一部は行政によって鳥獣保護区に指定されている。この鳥獣保護区は、環境大臣または都道府県知事が、鳥獣の保護を図るために必要があると認めるときに設定するものである(「鳥獣保護法」第8条)。鳥獣保護区

内では狩猟による鳥獣の捕獲は禁止されているため、その地区では駆除が行なわれていない⁽²¹⁾。イノシシを駆除している一方で鳥獣保護区においてはそれを保護しているという、行政の矛盾する態度に対して、「駆除の不徹底のために獣害がなくなるならない」という共通意見が述べられているといえよう⁽²²⁾。

むら人はこのような「保護団体」や行政に対する意見を語ることによって、日々イノシシの害を被りながらも、その完全な解決策を見いだせないでいる苦しい立場を、当地域の獣害を理解していない人びとに説得しようとしているのではないだろうか。

5. 村としての「自界」

(1) 農業従事者以外のむら人の意見

では、農業従事者のもつ共通意見はどこまでの広がりをもつのだろうか。これに関して、農業に従事していないむら人が、「獣害問題」に関して農業従事者と同じ意見を共有しているかどうかを検討してみたい。

被害は稲刈りの時期、畦、掘り起こし。中に入られたのか、一部ちょっとこけていた。家の近くで、電気柵を張っていないところが2、3年前ひどかった。柵いうんも、将来効き目なくなるだろう。(電気柵の前は)ビニールだけ張っていた。生活しているもんに親身に考えてほしい。保護団体の人自身が被害にあったら(どうするのか)。害を与えるもんを駆除してほしい。

(⑦.30代.男.非：職場にて)

畑しているのは女の人も多い。朝畑に行ったら取られてて、腹立てる人多い。やっぱり獲らないといけない。

(⑨.50代.女.非：耕作地にて)

これらは、手伝い程度に農業をしているむら人や、従事していないむら人へのインタビュー内容である。このような主に農業に従事していないむら人も、駆除の必要性や「保護団体」を「他界」とみなして意見形成する点など、意見の内容とその形成のあり様が主な農業従事者と同じ部分があることがわかる。

このように直接的な利害関係にないむら人にも共通意見が見られることから、「獣害問題」に関して

は村全体がひとつの「自界」となっているといえよう。

(2) 共通意見が伝達される場

K村は、外来者の転入もほとんどなく、伝統的な村社会の機能が残っている地域である。伝統的行事も多く残っており、むら人どうしが集い話し合う機会も多い。このような村落社会のもつ特質は「獣害問題」における村の「自界」の形成をも支えているのではないだろうか。

K村における協議の場としてもっとも重要なものは、愛宕講と呼ばれる寄合である。これは月1回行なわれ、7つの班ごとに、全世帯から1人ずつ参加していくつかの議題について話し合われる⁽²³⁾。その議題には、祭りなどの行事や村の運営に関することが取り上げられる。また先に述べたように、農業組合に加盟している家がほとんどであるため、農業に関することも議題として上げられる。毎年獣害が発生する時期ではその駆除をめぐる取り決めもこの場で行なわれる。農家ではない世帯の人も参加しているが、その人たちも含めて話し合われる。

この愛宕講で話し合われる内容やその議論の過程については示すことができないが、その一端を表わす発言をえた。

農業をやめて30年になる。昭和41年に村に戻ってきたが、それから農業はしていない。それまでは、家で食べる分くらいをつくっていたが、手伝い程度。だから農業のことはよくわからない。イノシシの話は、常会(愛宕講)で聞く。電気柵で被害はなくなったみたい。農業しているもんにとっては、イノシシは獣害や。駆除申請は出しているようだけど。(寄合で)墓の供え物を持って帰るように言われた。食うもんないから、そこまで来ているみたいだ。数も以前より増えているらしい。夜11時に来る。イノシシはいないほうがいい。いなければ、そのほうがいい、それに越したことはない。

(中略)

山奥でいてくれたら、なんぼいてもかまわん。猟師で好きな人なら(山)奥でも行くだろうし。

(⑥.50代.男.非：自宅にて)

このように、寄合でイノシシのことが話されており、農業に従事していないむら人にもイノシシに関する意見が伝達されていることがうかがえる。

寄合は夫と私、どちらかが出席。イノシシの話を寄合で聞く。「稲が倒れた」「電柵を張ってから来なくなった」など。動物が好きだから、別に悪いやつだとは思っていない。餌がなくてかわいそう。きっと、農業をしてもこんなところまで餌を取りに来なきゃいけない、イノシシがかわいそうと思う。ウリが出たとか村の人が言っていて、見てみたいとは思ったけど。イノシシがつかまらないといいなと思う。罾を仕掛けている人が1人いて、いろいろ獲っているみたいだから。村の人には言わないけど。寄合でそういう話になったら、聞いているだけ。

(中略)

イノシシなどに関して、村の人は悪者扱いするけど私たちは別にそうは思っていない。主人も同じです。

(⑧. 50代.女.非：電話にて)

この意見はK村で唯一県外からの来住者のものであり、やや特殊といえるかもしれない。しかし、このようにきわめて自覚的に自らの意見を「沈黙」させることはないにしても、寄合での合意内容に自らの意見をすり寄せることは想像できる。また、とりあえず寄合での合意内容に意見をあわせておくと、村の生活上で批判されることがないということもあるだろう。

こうしたフォーマルな場以外の、日常生活においても共通意見の伝達は行なわれている。

農業はしない約束で結婚した。義理の両親が農業をしている。親戚などに手伝ってもらっている。父から聞いた話だが、電気柵をしてから全く被害が出ていないらしい。見てみると大変そう。イノシシに遭ったことはない、遭ってみたい。(イノシシに) やられた時は道でワーワー言っているけど。被害にあった人もそのときは腹立つだろうけど仕方がない。鉄砲を持ってまでというわけではないだろう。本当に腹が立ったらやめるだろうし、取られるけどまた植えて、その繰り返し。一生懸命やっている人にしてみれば腹が立つでしょうけど。

10年前(嫁に来る前) 京都にいた頃はイノシシのことを聞いたこともなかった。山にいて猟師が獲って食べるものと思っていた。山はもっと奥のものだったのに、(村に来て) 今はすぐそこにある。イノシシも身近になっている。

(⑩.40代.女.非：区長宅にて、区長同席)

被害の跡をみたことはある。一面クチャクチャで、匂いがあるらしい。コンバインで刈れないらしい。田畑に出ないから、イノシシも見ただことない、興味もない。(同年代の) 奥さんどうしてイノシシなどの話が出ることはない。道端などでおばあちゃんなどから話を聞く程度。

(⑪.30代.女.非：道路にて)

これらは農業に携わっていない人たちへのインタビュー内容である。この内容から分かるように、年配の農業従事者との日常的な会話において、イノシシのことが話されていることがわかる。

K村において、農業はそれ自体零細ではあるが、村社会を支える重要な要素であり、また、主な農業従事者の多くが、区長をはじめ村の主要な役割を担っている。よって、K村において農業に関する問題は取り上げられやすく、とくに利害を伴う問題であるため被害に関する意見は共有されやすいものと考えられる。

このように、村社会におけるフォーマルな場や日常的な場においてイノシシに関する意見が伝達され、村の「自界」を形成しながら、結果的に地域におけるイノシシへの態度が方向づけられているといえよう。

6. まとめ

以上のように、イノシシの「獣害問題」は農村における農業の変化を背景にしている。そして、当地域の獣害の実状を理解しえない人びとを「他界」と意識しながら、「獣害問題」に対して村の「自界」を形成し、イノシシを「害獣」視するような意見をむら人は共有している。そして立場の異なる人びとに対しては、多様な個人的意見ではなく、村のフォーマルな意見としての共通意見が表明されやすいことがいえたのではないだろう。

住民の個人的意見は、丸山(1997)の指摘にもあるように両義的であることは無視してはならない。駆除によって、野生動物の個体数を減らしたとしても「問題」がなくなるわけではない。住民も駆除が最善の方法であるという認識をもっているわけではなく、あくまで被害を軽減させるということが最優先課題なのだ。しかし害を伴う場合、野生動物に対して好意的な意見は共有されず、「沈黙」として排

除されやすいことが明らかになった。好意的な部分が欠如した共通意見が外部に表出されることによって、住民の「害獣」視が強調されることになる。個人的意見と共通意見とを見極めるための手法が確立されているわけではないが、駆除という対策がこのような共通意見を土台として正当化されていることは留意すべき点ではないだろうか。

もうひとつの課題として、住民がもつ「保護団体」に対するマイナスイメージがあげられる。そのようなイメージを生み出している原因としては、自然保護運動や動物愛護運動のあり方が影響していると思われる。これらについては、稿を改めて検討すべき課題である。

「獣害問題」における野生動物と人間とのかかわりは、「害獣」としての野生動物であり、害というものを介しているため、それを人間－自然関係へとただちに一般化することはできないかもしれない。しかし、野生動物の存在は、常に人間活動との相互関係の中で規定されており、人間側の対応次第でその存亡を決定されかねない。「共存」というテーマへの明確な答えは、結局は人間側の判断でしかありえない。その判断を誤らないためにも、立場の異なる人びとへ表明される意見が、すべての住民にとって同質な意見であるとは限らないことを忘れてはならない。

注

- (1) なお本稿においては、「害獣」や「獣害問題」などは人びとによって構成されたものであると捉えるため、そのような単語はかっこに入れて表記する。
- (2) 1999年に「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」の一部が改正された（2003年には「鳥獣の保護および狩猟の適正化に関する法律」として施行されている）。この改正によって、野生動物の捕獲の要件や許可などの鳥獣行政に関する権限は、国から都道府県に委託されるようになった（常田、2001）。また、このような都道府県が有する捕獲許可権限の市町村への委譲については法律上定められてはいないが、都道府県は条例を定めて市町村が処理することを規定できる。本稿の調査地である滋賀県は市町村にその権限を委譲しているため、イノシシの捕獲は志賀町長によって許可される。また、この改正に伴って「特定鳥獣保護管理計画制度」が制定された。これによって、主に各都道府県が主体となって、著しく増加または減少した鳥獣を保護管理するための計画を樹立できるようになった（畠山、2001）。1999年の時点で全国22道府県、25の保護管理計画が樹立されており、その後、計画を策定する県が増加している（日本林業調査会、2001）。調査地である滋賀県では、当時保護管理計画は樹立されておらず、従来の手続きで駆除が行われていた。

- (3) 鳥越（1997）は、「他界」の存在を「自覚」することによって、「自界」の独自性を再確認することを「交流」と述べている。しかし、本稿の場合、本文でも述べているように、「他界」との対立が顕在化しているわけではないため、自覚的とはいえない。よって、以降では「他界」を「自覚」でなく、「意識」として表現する。
- (4) 本稿における調査地はK村という一つの集落であるが、ここでは「村」と表現することにする。またK村の住民をここでは「むら人」とする。
- (5) 聞き取り調査は、調査者が質問を行ない、それに対する被調査者の回答を書き留めるという方法で行なった。1回の聞き取りは、約1、2時間行ない、被調査者全員ではないが、日を改めて再度聞き取りを行なった。
- (6) K村独自の耕作台帳で、農業組合によって管理されている。これには、作付けされた面積や作物の種類が詳しく記されている。
- (7) 現在その跡地を町が買い取り産業廃棄物および一般廃棄物の焼却施設整備計画があがっている。
- (8) さらに、産業としての農業の低下や担い手の変化などが複合的に作用して、イノシシに対する抵抗力が弱まっていることも示唆できる。
- (9) イノシシが体を冷やすため、寄生虫対策、さらに他個体とのコミュニケーションとして粘土質の土に体をこすりつける動作を「ヌタウチ」といい、その泥浴びの場所を「ヌタバ」という（仲谷、2001）。
- (10) イノシシの子どものこと。
- (11) 当地ではイノシシによる人身事故などは起きていないため、利害を伴う体験は農作物や耕作地に関するものに限定される。
- (12) 中河（1999）は、構築主義の社会問題におけるレトリック分析を、「有害マンガ」問題を事例に紹介している。ここでは、レトリックについてさらに詳細な分析が行なわれているが、本稿ではレトリックそのものを分析するのではなく、ある方向性をもったレトリックが構築されていることを明らかにすることが目的であるため、レトリックというものを「説得作業に使われる言語的な資源」という、幅広い概念として定義するにとどめることにする。
- (13) 桜井（2002）は、特定の地域内で流通し、それを語ればただちに了解されてしまうもので、同時にそう語ることがそのコミュニティ内の成員の証となるような語りをモデル・ストーリーとよんでいる。ここでいう共通意見は、この村における「獣害問題」のモデル・ストーリーとよんでよいものである。
- (14) 桜井は、ライフヒストリー・アプローチについて実証主義アプローチと、それに対照する解釈的客観主義アプローチ、対話的構築主義アプローチについて述べている。このうち解釈的客観主義アプローチについて「帰納論的な推論を基本としながら、語りを解釈し、ライフストーリー・インタビューを重ねることによって社会的現実をあきらかにしようとするものである」（桜井、2002、25頁）としている。本稿におけるインタビュー調査は、桜井の解釈的客観主義的アプローチに近く、初期の聞き取り調査から推論を立て、それに依拠しながらさらなる調査を行なった。このような調査過程から収集したデータ

を比較、分析して理論化を試みた。

- (15) K村と隣接する市との境は1998年から鳥獣保護区に指定されており、狩猟が禁じられている。これ以前も保護区に指定されていた。
- (16) 当地ではイノシシによって水田を荒らされることを「まく」という。
- (17) これらのインタビュー内容は、筆者とむら人との対話の一部である。これらの意見が聞き手の問いかけをきっかけに、インタビューの場において構築されたものであるという見方もできる。しかし、仮にそうだとしても、筆者以外の立場の異なる人びととの間においても同じような内容が構築されているということが示唆できよう。
- (18) 鳥獣害のほか、気象上の災害や病虫害、火災などの災害によって3割以上の減収があったとき、その減収量を対象として農作物共済金が支払われる。
- (19) 実際は、具体的な保護団体が当地で活動を行なっているわけではないが、むら人には漠然とした「保護団体」へのイメージがあり、言説に現われているものと考えられる。ここでは、このような保護団体をかっこつきで示すことにする。
- (20) このような関係性について小林は、ライフヒストリー研究においてコミュニケーション論的な視角から検討している。その中で、「〈親密さ〉が十分に形成される前にはフォーマルな自己が呈示され、〈親密さ〉の増した後に呈示されるのがインフォーマルな自己である」(小林、1992、101頁)と述べており、調査者と被調査者との〈親密さ〉が増すと「内容」に多様な〈深さ〉のあるライフヒストリーが生み出され、それらに連関があることを明らかにしている。「フォーマルな自己」というのは本稿における「共通意見」に、「インフォーマルな自己」は「個人的意見」にいい換えることが可能であり、調査者との関係性と連関するといえるであろう。
- (21) ただし、有害鳥獣駆除等の理由によって環境大臣または都道府県知事の許可を得た場合は捕獲できる(野生鳥獣保護管理研究会、2001)。しかし、むら人は「保護区であるため駆除ができない」と言っており、制度と住民の認識の間に食い違いがみられる。
- (22) また、共済金制度に関しても、共済金が支払われる対象は耕作面積の3分の1以上の被害が生じたときで、そのた

めそれ以下の被害は補償されない。また、むら人の獣害防除対策にかかる負担をも考慮されていないという意識もむら人にあることが推測できる。

- (23) この寄合で話される議題については、事前に評議会が開かれそこで決められる。この評議会は、区長と総代、農業組合長と農業組合主事、そして各班に1人ずついる評議員によって構成されている。

引用文献

- 江口祐輔、2001a、侮れないぞ！ 行動・感覚能力、月刊NOSAI 53
- 江口祐輔、2001b、イノシシ被害対策研究、畜産技術548
- 小寺祐二・神崎信夫他、2001、島根県石見地方におけるニホンイノシシの環境選択、野生生物保護6
- 小林多寿子、1992、〈親密さ〉と〈深さ〉—コミュニケーション論からみたライフヒストリー—、社会学評論424
- 桜井厚、2002、インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方、せりか書房
- 常田邦彦、2001、鳥獣保護制度とイノシシ管理、高橋春成編、イノシシと人間—ともに生きる、古今書院
- 鳥越皓之、1997、環境社会学の理論と実践、有斐閣
- 中河伸俊、1999、社会問題の社会学—構築主義アプローチの新展開、世界思想社
- 仲谷淳、2001、知られざるイノシシの生態と社会、高橋春成編、イノシシと人間—ともに生きる、古今書院
- 畠山武道、2001、自然保護法講義、北海道大学図書刊行会
- 真坂昭夫、1989、戦後山村社会の「村くずし」と森林管理—猿害発生と都市近郊山村社会、内山節編、〈森林社会学〉宣言、有斐閣
- 丸山康司、1997、「自然保護」再考—青森県脇野沢村における「北限のサル」と「山猿」、環境社会学研究3
- 丸山康司、2002、「獣害」の存在と不在—ニホンザル問題における多元的な言説空間—、年報筑波社会学14
- 三浦慎悟、1999、野生動物の生態と農林業被害—共存の理論を求めて、全国林業改良普及協会
- 野生鳥獣保護管理研究会、2001、野生鳥獣保護管理ハンドブック、日本林業調査会